日本農民文学史

小田切秀雄 編
犬田　卯 著

人間選書
4

日本農民文学史

小田切秀雄 編
犬田　卯 著

人間選書
4

日本農民文学史　　人間選書　4

昭和52年10月15日　増補版第1刷発行

編　者　小田切　秀　雄
著　者　犬　田　　卯

発行所　社団法人 農山漁村文化協会
郵便番号107　東京都港区赤坂7丁目6－1
電話 東京(585)1141(代) 振替東京2-144478

1391-311040-6805　印刷／カシヨ
〈検印廃止〉　製本／文有堂
©犬田卯　1977
定価はカバーに表示

再刊にあたって

小田切秀雄

この本の最初の版が出てから、もうそろそろ二十年になる。この二十年が、農民と農民文学とにとってどのような二十年であったかについては、のちに一端を書きとめておくが、二十年のあいだにこの本の本文は〝古典〟の一つとなった。最初の版は難産だったが、その後、時がたつにつれてこの本への評価は高まり、この本を手に入れたいというひとはふえて、古書店での値段などもずいぶん高くなった。初刊いらい二十年しての今回の再刊は、これがながい歳月によって磨滅されるどころか、かえってそのほんらいのよろしさが洗い出されてきた、ということを意味する。

初刊が出る直前に犬田さんは亡くなっていたから、今回の版も犬田さんの本文そのものにはなんの変更もありえない。解説をかねたわたしの「日本農民文学史の展望」のほうも、改稿しようとすると限りないので、初刊のときのままとし、さしあたりこの「再刊にあたって」という一文を添えることにした。「日本近代農民文学史年表」（作品一覧表）は、初刊当時まだ学校を終ったばかりだった南雲道雄君に下書きをつくってもらい、それに手を加えてわたしと二人の名で掲げたものだが、その後、南雲君は農民文学の専門研究者になり、『農民文学』に連載した史的研究や、単行本の著書『百姓烈伝』（たいまつ社刊）等でその研究ぶりが知られるようになっており、今回はもっぱら同君に年表改

訂のことに当ってもらった。初版のときは、それまでにそういうものがまったくなかったので、とりあえず、ということで短時日のあいだにつくったから、誤りや不正確なところが多いことがあとでわかったが、今回はそれらがすべてただされうることになった。わたしとしても心強い。なお、この年表に、この本の初版刊行以後こんにちにいたるまでのぶんを加えていないのは、中井正義著『戦後農民作家論』(国文社刊)に、敗戦直後から昭和四十二年前半までの詳細な年表が載っているからで、そのうちの十年ぶんと四十二年以降の十年分とを本書に加えると、ページ数がはなはだ多くなってしまう、ということもある。

なお、「昭和初年の農民文学運動機関誌細目」は、住井さんからしばらく預った犬田家所蔵本だけに拠ってつくったもので、ほんらいなら、それらと対立したプロレタリア文学がわの『農民の旗』その他、さまざまな傾向の運動・準運動の機関誌類についても、細目をあわせて掲げねばならなかったが、初刊当時までどれほども入手できず、その後も全部をそろえるにいたっていないので、いずれ将来にということにしたい。

昭和三十五年から同五十年までの十五年間に、農家戸数は百十万戸が減り、農業就業人口も七百二十万人が脱農して他の産業へ流出した。それは農民が日雇・臨時工・出稼ぎ・季節雇・農村工場勤め・土建会社人夫等になる、という形で大量的にはじまり、農業を〃兼業〃している場合でも、しだいにそのほうは両親にまかせるというやり方が一般化した。昭和三十年代からの日本資本主義の急激

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な〃高度成長〃と、それの政策の一つとしての昭和三十六年の「農業基本法」は、近代的な大規模経営化をおし進めると同時に、その資本をもたぬ零細な農家の圧倒的な大部分を切捨て、大量の農民を大資本のための流動的な労働力に転化させた。農地は次々とつぶされ、過疎はびっしり全国にひろがった。そして農村の荒廃は、右のような状況をなんとか切りぬけて農業を続けている者のあいだにも、その心の内部と、農業そのものとの、次に示すような荒廃ぶりとして現われるにいたっている。たまたま松永伍一がそれに触れて書いている文章が適切なので、それを写しとることにしよう（三一書房刊『講座・農に生きる』第五巻の松永「農村の仕組みと方法」から）。

……有吉佐和子の『複合汚染』に対して「朝日新聞」に出された埼玉県の農民（五五歳）の反論と、それへの有吉氏の反論を私はおもいだす。

一、有吉さんは農薬を使った田んぼと、そうでない田んぼとは素人の私でさえはっきり分ると申されましたが、私は三十余年、無農薬有機農法時代から今日の農薬化学肥料万能時代とやってきていますが、一目でどう違うのか教えてほしいものです。

（有吉の答。化学肥料と農薬を使った土は、有機質を多く持っている土と較べて土中のバクテリヤやカビなど微生物の数が大層少いので、一目で土の色が違います。有機質の多い土ほど黒いのです。完熟した堆肥がまっ黒であるように。さらに言えば、匂も、味も、違います。これは農家の方なら実際におためしになれるでしょう）

二、昔は化学肥料もあまり使わず、除草剤や殺虫菌剤もなかったので、反当り収量五俵半か六俵ぐ

らいだったのが、今は七俵半から九俵もとれます。なぜ死んだ土から九俵もの収量があるのでしょう。

（有吉の答。死んだ土からとれた九俵の米は、籾をつけておいても三年で死にます。生きている土からとれた米は、籾をつけておけば十年でも二十年でも死ぬことがありません。反収の多少は、そのままとれた米の質を物語っています。現在多収穫をほこる化肥で作った米が、精米のとき著しく目減りすることは御存じだと思いますが、如何ですか）

私（松永）は、この反論交換をみて、一種の失望の念を抱いた。八項目の質問に応えた有吉氏の主張の方が、どう割り引いて考えても正しいとおもわれるからである。私も二七年間、戦前から有機農業に関わってきたので、有吉氏の答えに同感できるし、しかも、農業をしたことのない女流作家にこういう「利口そうで根本のところが抜けている質問」を投げている知的な農民が、この程度の生き方（状況便乗的な生き方）で尖端意識をもし持っているとしたら、とんでもないということになるな、と危惧したものである。

松永のいう通りだと思う。農薬と化学肥料によって現に農地が大はばに痩せ、実質的に破壊されつつあるということは、農業そのものが破壊されつつあることを意味し、しかもそのことにまったく目をつむって、かえって有吉にかみついてゆくというところに、こんにちの一部の農民の心の状態がある。もちろん、自分の農地が痩せてゆくことに不安と空虚を感じている多くの農民、またそれをなんとか打開してゆくために苦闘している農民が、その他方にいることもまた事実なのだが。

〃高度成長〃の時代は、昭和四十五年、万国博覧会での大資本による科学・技術のお祭騒ぎを最後として、もはや再び帰ってくることのない時代として過ぎ去ってしまった。しかし、それまでにさんざんに破壊され追いつめられた農業と農村と農民との現実は、もはやその以前に戻すことができるというていどのものではない。有吉佐和子の『複合汚染』は、日本の農業がこうなってしまっていることの、農民だけにでなく日本人全体にとっての痛切な意味合いを追及したもので、破壊の爪あとがいかにすさまじいかをきわめて具体的にえぐりだしている。また、東北地方を中心に季節労働に出かけてゆく（出かけてゆかざるをえない）農民が、昭和五十二年現在で約六十万人あり、近年この数はほぼ固定しているが、このことは、季節労働を不可避にするような農村構造が固定してしまったということであり、草野比佐男の詩集『村の女は眠れない』は、そういう農村の妻という角度から、農村のその構造がなま身の人間にとって現に何を意味しているかを詩的に鋭くこじあけて、出稼ぎの夫たちに妻のあたたかい身体のそばに帰ってこい、また、村の〃女が眠れない理由のみなもとを考えるために帰ってこい／女が眠れない高度経済成長の構造を知るために〃、そしてそれとたたかうために、〃女の夫たちよ／一人のこらず帰ってこい〃、と歌うところにまでいたっている。

これらは、現在の農民と農村に、文学が鋭く切り結んでいっている二つの例だが、現代文学は、全体としてはそういう切り結びにおいての活力を示していない。有吉の『複合汚染』も、小説として書かれたものではない。小説的なところもふくまれてはいるが、調査報告や記録や討論や感想やのさまざまな形を組み合わせたもので、それなりに、現在の文学の新しいスタイルの一つをつくりだしたも

のと見ていいものでもあるが、文学的に熟したという性質のものではない。主題の性質上、そういう書き方をするのが、この〃農業をしたことのない女流作家〃にとって、さしあたり可能な唯一のやり方だったのであろう。しかしまた、〃農業をしたことの〃ある作家たちのだれもが、これだけの徹底した追及を試みているわけでもない。

だが、農民文学がさまざまな活力を示すようになってきていることは、たとえば『土とふるさとの文学全集』(臼井吉見ら編、家の光協会発行) 第十五巻に集大成されている十余年間の〃農民文学賞受賞作品〃のそれぞれによっても、かなりのていどに実証されることになっており、その個々の作品のふくむ問題やおもしろさについては、同巻の巻末解説でやや具体的に述べておいた通りである(なお、〃農民文学〃という概念じたいについても、こんにち新たな検討が必要になっていることについて、同全集第五巻「反骨の路線」の巻末解説で述べておいた)。なお、そのほかの各方面に(いわゆる〃農民作家〃のほかのところに)農民文学と見ていいさまざまなすぐれた作品があることも近年の事実である。——作品だけでなく、読者や研究者たちの農民文学への関心も深まり、またひろがっていることは、『土とふるさとの文学全集』が予想外の広汎な流布を見るにいたり、しかも、配本をかさねているうちにさめてくるという現象も生じていない、ということのなかに一つのあらわれを示している。特殊な例外を除いて、農民文学は売れないというジンクスのようなものが出版界にはあったが、それは破られたのであった。これは、農村から離れ故郷を失ったひとたちのノスタルジアによる、という面もあるが、そういう面をも通して農民文学への関心はひろがっているのである。

また、研究に関しても、松永伍一の『日本農民詩史』のような大著が成立し、またその刊行が可能になり、中井正義や井上俊夫による立ち入った農民文学検討の書が出るようになり、山田清三郎の農民文学史二巻も出た。『農民文学』連載の南雲道雄の農民文学史もやがてまとまるであろう。若い農民文学研究者もすこしずつふえてきている。

犬田卯の代表的な長篇小説『村に闘ふ』が、今回はじめて『土とふるさとの文学全集』第四巻によって読者の前におかれた、ということも書きそえておきたい。これは同書巻末の南雲の解説がくわしく述べているように、大正末年に書かれ昭和四年に全国農民芸術連盟から刊行されながら、たちまち発売禁止になって読者の眼からおおい隠されてしまった作品であった。この『日本農民文学史』の刊行に苦労したことのあるわたしとしては、今回かれの代表的な長篇小説の一つを読者の前におくことができるようになったのを、ほんとうにうれしく思っている。しかし同時に、『土とふるさとの文学全集』の全体のなかにおくことによって、かれの仕事が日本の農民文学史のなかにもっている積極・消極の意味の厳格な測定と評価が可能になってきた、ということもあり、この『日本農民文学史』はそういう点からあらためて立入った検討が必要であるとともに、またそれに堪えうるものである。

はじめに

小田切秀雄

この本は、日本の農民文学運動の歴史の最初の詳細な叙述である。いまでは、この史的叙述のなかに実証的に示されているところのじみな農民文学運動が、大正末年から昭和初年にかけて展開され、その運動を通して多くの貴重な経験が重ねられたということじたいをさえ知らぬひとがふえている。しかもこの運動こそは、日本近代最初の農民文学運動であり、さまざまな困難の中を長年月にわたって機関誌を出し続け、農民文学の必要と存在理由と新たな問題とを強く訴え続けてきていたために、昭和初年には、農民文学といえばすぐにこの運動が思い出されるくらいになっていたのであった。だが、その後、運動は変質してしまい、この運動に関する資料も、弾圧と戦争と空襲のために多くがほろび去ってしまった。そして日本近代文学史に関する研究者たちの活動も、さいきんはようやく大正・昭和の領域にまで立入りはじめながら、大正末から昭和初年の社会的・文学的激動期を叙述するにあたって、プロレタリア文学の運動と、新感覚派いらいの芸術派の運動との鮮烈多彩な動きに眼をうばわれて、同じ時期に一隅でこうした農民文学運動が日本の土の匂いを濃く漂わせながらねばりづよく展開されていたことにまだほとんど関心を向けていない。わたし自身の経験でも、一昨年から昨年にかけて大月書店から『講座・日本近代文学史』全五巻を編んで出したときに、明治以来の人民的革命的文学動向には十分に項目と紙数とをあてたつもりでいて実はこの農民文学運動史のために一項を設けねばならぬということをついに思いつかなかったのであった。昭和初年にプロレタリア文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

運動と農民文学運動との間で大きな論争があり（本書の第十七章にくわしい）、プロレタリア文学が当時の勢いとして圧倒的に勝利していって、プロレタリア文学運動自体がその内部に独自に「農民文学研究会」をつくり、それまで農民文学運動の中心になっていた犬田卯らをはげしく論難した——というような事態、また実際にプロレタリア文学系の農民文学作品には黒島伝治、立野信之、橋本英吉、須井一らのかなりにすぐれた作品があり、犬田卯らの農民文学運動自体のなかからは必ずしも強力な作品が多くは生れなかったこと、これらが農民文学運動の歴史の再検討と再評価を遅らせていたということもある。この農民文学運動の最初から最後まで中心的なはたらき手として理論上・作品上・運動組織上の精力的な活動を続け、運動の危機にはほとんど独力で打開に当ってきた犬田卯が（といっても、夫人で作家である住井すえが一貫して協力していたが）、戦争中からの長い病臥生活ののちに昨年亡くなってしまったことも、歴史的な検討をいちじるしく困難にしている。

だが、幸いここに、犬田氏が昭和十二、三年ごろに着手され敗戦後になお加筆を続けられた日本農民文学運動史叙述の部厚い稿がある。昭和十二、三年ごろといえば、本書の本文の終りの方および解説によって知られるように、「下から」の人民的ないし農民的な農民文学運動が「上から」の御用文学的な農民文学運動にしだいに転換させられてゆくちょうどその転換点に当っており、犬田氏がその後ついに脱出しえなかったまったくの孤独な場所に追いこめられてゆく時期に当っている。氏は、そういう時期に、それまで自分が全情熱を傾けて参加し推進し守り続けてきたところの農民文学運動の歴史の全体を、できるだけ詳細に、できるだけ資料を多く使って客観的に、書きのこしておこうとされたのであった。本書所収ぶんのほぼ倍に近い量の原稿が書かれ、わずらわしいまでに長文の引用が次から次へと行われた。それは半ば資料集の観をさえ呈するまでにいたっていた。この貴重な本の刊

行がいままで実現しなかった理由の一つはこういうところにある。わたしはいま、ハンサな引用文を大はばに削って本書のような形にしたが、こうした削除が資料集としての価値をいくらか減ずることになるという点ではたいへん残念でもあるが、これだけ削ってもまだ資料的部分が多過ぎるともいえるのである。ただ、主要な資料の引用は一つも削ることをしなかったから、資料集としても有効に使いうるものであることにはべつに変りはない。

編者としてのわたしの責任においてこういう形に整理したがそれでもなかなか刊行をひきうけてくれる出版社がなく、ついに犬田氏の生前には刊行が実現しなかった。犬田氏が亡くなり、この原稿をかかえてくやしがっているわたしに『日本読書新聞』編集部が同情してくれて、同紙のゴシップ欄にとりあげてくれたことがキッカケとなり、やがて農山漁村文化協会との間に話がまとまった。同会は、会のほんらいの仕事の一つたるべきものとしてこれの刊行を決定されたのである。同会にたいするわたしの敬意と感謝とをここに書きつけておきたい。なお、わたしは犬田氏とはついに一度も会ったことがない。両方の知人で古い農民詩人である渋谷定輔氏がこの原稿を出版しようとして努力しておられ、同氏からの依頼でわたしは協力したまでであるが、犬田氏と文学上の立場のちがうわたしなどがこの本のために多少ともはたらくということを、犬田氏御自身もいやがらなかったしわたしも自分の義務の一つと考えたのであった。なお、今では童話作家として広く知られている住井すえ氏が、犬田氏没後のこの本の刊行についてもいろいろとこまかい配慮をされたことは、しぜんなことでもあるがやはりここに書きつけておきたい。

いま、農民文学は新たな展開をはじめようとしている。長い停滞は少しずつではあるが破られはじ

め、機関誌『農民文学』（季刊）を中心とする日本農民文学会のさかんな活動をはじめとして、農村での生活綴方運動、青年たちの生活記録運動、同人誌、等、また山代巴の『蕗のとう』、『荷車の歌』や伊藤永之介の諸作品をはじめとする有名無名の多くの作家による農民文学作品の新たな達成、等々がつくりだされており、農民文学の新展開が現代文学の基本的な課題の一つであることは文学の内がわからも外がわからもしだいに多くのひとによって切実に実感されはじめている。しかも、農地改革後の農村関係は、戦前の地主・小作という対立関係よりはるかに複雑化した深刻な対立関係におかれ、一方に独占資本の機構的支配とマス・コミの巨大な力とがあり、他方に古い習俗や人間関係やが土地所有関係の変化に伴って変化しながらなお根強い規制力をひそめているという現実がある。肉眼で見うる日常的な農民の現実から浮き上った農民文学はありえないと同時に、肉眼で見うるところだけを描いたのではこんにちの深刻な対立関係の立入った表現にはいたりえないという大きな問題も出てきている。農民文学のこうした文学的困難を打開するためには、その手段の一つとして過去の歴史と経験の十分な再検討が必要である。その意味で、この本は明日のために読まるべき本と言うことができるであろう。

ただし、日本の農民文学運動は、この本に叙述されたところのものが本流となっていたことは事実であるにしても、これだけがすべてであったのではない。ほかにも多くの貴重な経験とその歴史があり、それらの全体との関係で見てゆくことが必要である。巻末に加えた解説と年表（作品一覧表）とは、そうした意味での必要な補足の一部分をなすものである。

一九五八年七月

日本農民文学史

目次

はじめに

大正昭和 農民文学運動史……犬田卯…九

はしがき……一〇
一、農民文芸運動の端緒……一三
二、農民文芸研究会生る……二一
三、農民文芸に対する批判と論駁……三〇
四、『農民文芸十六講』の刊行、その他……三九
五、機関誌『農民』の発刊……四七
六、農民文芸会の内紛……五四
七、農民自治会と非政党運動……六四
八、農民文芸会の自壊……六七
九、第一次『農民』の収穫……七一
一〇、第二次『農民』農民自治会より出ず……七七
一一、第二次『農民』の収穫……八一
一二、「全国農民芸術聯盟」の結成と第三次『農民』……八五
一三、プロ・ブル文芸に対する批判……九一

一四、農民文学理論の確立へ……九七
一五、農民文学運動の展開……一〇六
一六、理論および行動の一層の深化……一二五
一七、「ナップ」農民文学の排撃……一三三
一八、聯盟の組織がえ——「農民自治文化聯盟」生る……一三〇
一九、M、A、Fイズムの克服……一四一
二〇、解放理論としての農民自治主義……一五一
二一、附記——その後の農民文学……一五七

著者・著作年表……一六八
亡夫の旧友におくる手紙……住井すえ……一七三

日本農民文学史の展望……小田切秀雄……一七五
—犬田氏のこの本の解説をかねて—

一、現在の農民文学の問題……一七六
二、歴史的な展望へ……一九〇
三、自然主義から大正中期にかけて……二〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com